

燐子さんは暴走する

うみみ山

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何故この才能が自分にあるのだろう？

私を必要とする人間っているんだろうか？

でも、必要してくれる人を見つけたから

私を愛してくれる人を、愛せる人を見つけたらから

俺は

私は

あなたのために、必要であり続けよう

目

次

何気ない日常

気持ちは暴れる

天才少年の考えは矛盾だらけでふざけてる

相対性理論とその原理。あ、授業じゃないよ？

奇妙な運命

34 22 8 1

## 何気ない日常 気持ちちは暴れる

一つ彼との話をするならば、最初はただの不可抗力だつた。何のハピニングもなく、学校に行つて帰つてゲームをして少しピアノを弾く毎日。ピアノも人前に出ず、好きだから引くだけ。そんな自分に嫌気が指して、劣等感で後ろ向きになつていく。変えたくても変えられない。そして、それでまた自分が嫌になる負の連鎖の毎日だ。

だが、そんなある日だつた。一つハピニングが起こる。

その日も私はいつも通りに学校に登校して、いつも通り教室へ向かつた。

教室のスライド式のドアを開け、教室に入ると、いつもとは違う感じがあつた。まあ、簡単に言うなら少しづわついていたのだ。なんだろうと少し気になり、聞き耳を立てると

「あいつ、誰だっけ？」

「ほらー！あの人だよ。弦巻家と肩を並べる天神家の一人息子！」

「あ～知つてる知つてる。いつもテスト1位の。名前だけなら聞いた事あるぜ」

ざわつきの正体は、一人の男子生徒だつた。会話からすると、要するにお坊ちやまで、才能溢れる人物なのだろう。

でもその時の私はその会話がまるで頭に入つていなかつたのかもしれない。何故か？それは私自身自覚がない。というか、覚えてない。

どういう訳か彼は、私の席に座つていたのだ。恐らく、席替えの時に彼は欠席でその事に気付かず私の席に座つているのだろう。そういえば、いつも私の隣の人は欠席だつたようないい。

間違つてるな……

普通、私はこういう時慌ててしまつて声も出ないだろう。しかも男子生徒ときた。ますます緊張するばかりだ、それなのにそれなのにだ。私の体は意識とは逆に、足を動かし、自分の体を席の前まで移動

させた。

「あつ、あの」

彼は、なんだといった感じでこちらを睨む。

「す、すいません。そこ……私の……席……なんですけど…」

「あ？」

そう。私の口は文字通り、意図せず開いていた。これが、最初の彼との会話だった。

\* \* \*

パチッと、まるで決められた時間に鳴る目覚まし時計のように目が開く。意識が覚醒して、夢の世界から現実の世界に引きずり出されたのだ。氣怠い体をモソモソと動かし体を起こす。フア～と大きな欠伸をして焦点の合い始めた目を擦りながら締め切られたカーテンをサッと開ける。時刻は5時半。比較的起きてる人は少ない時間帯。外を見ると朝の犬の散歩をしている老人、新聞の配達をしている若者がいる。つてそれは私も一緒か。はあとため息をつき、私は思いっきり開けたカーテンを締め切った。

色々な行動が少しアグレッシブになつてている。少し機嫌を悪くしてしまつているせいだろう。

何故不機嫌か。まあ、本当に傍から見れば、イライラする人もいれば、呆れる人もいる理由だ。その理由は簡単。ただただ、もう少し見ていたかったのだ。さつきまでの夢の世界の出来事を。

(もう少し空気読んでよ。私の意識)

理由もなく、罪のない自分の机を軽く叩く。軽くといつても、今の軽くはドンと大きな音が鳴り響く程度の、軽くだ。(もはや軽くない)当然、自分の意識に空気を読めなんて無理難題ができる筈もなく、悲しい現実が私を苦しめるのだった。あ、苦しめてはいなか。この場合は悩ませる、か。ニュアンスが違うから、こっちの方がわかりやすくいい。うん、日本語難しい。

見ていた夢は3ヶ月前の出来事の夢。彼との出会いの夢。あの時は怖かつたなくなんて今では思いもしないことを思い返す。まだそ

んなに経っている訳でもないのに何故か懐かしんでしまう。それほど、今までの私では考えられない程衝撃的で大きな出来事だつた。これから沢山のことがあつた。人前に出るのが大の苦手だつた私が、今ではR o s e l i aというバンドに入り、キーボードをやつている。今まででは考えられない程、この3ヶ月間で私の生活はガラリとかわつたのだ。

おつと、感慨深く振り返るのはここでおしまい。さつきまでは不機嫌だつたけど、そもそもこの時間にはばつちり起きてしまうのはいつも通りだし仕方ない。それで、私の機嫌は元通りになる。とにかく支度をしよう。「約束」の時間まではかなりあるが、やれることは早めに済ませよう。私は今の寝巻きから制服へと着替え、今日の授業で必要なものをカバンに押し込む。これで朝支度をおしまい。ご飯の用意は、今日はしなくていい日か。今日は彼の家で食べる日だ。

もう分かるとおもうが、私と彼、天神輪渡あまがみわたるは正式にお付き合いをしている。彼自身お坊ちゃんだから、私が豪邸に行くのか? って思う人もいるかもだけど、とある事情で彼は一人暮らし。今はアパートの一室で暮らしている。彼の両親も、彼の生活が心配だつたらしく、面倒を見てくれると助かるし、彼女だと尚更だということで彼の親公認なのである。私はというと、私の両親もこのことを公認している。もうドンと来いくらいの公認。多分私が彼を正式に親に紹介したら、婚約出来るレベルである。冗談抜きに。

簡単にこのことを説明すると、私の親は昔から結構私にベツタリで私の性格のことでかなり悩んでいたらしい。私が、R o s e l i aに加入+彼氏が出来たという報告は問答無用で泣き出したくらいだ。やつと、人前に立てるくらい成長してくれてとても嬉しい、と。その時は私も泣いてしまつた。

彼氏についてはかなり言及されたが、R o s e l i aに入れたのも彼のおかげだということや、色々な出来事を話すとすんなり認めてくれたのだつた。それからというもの、毎日朝挨拶を済ませて、ご飯の時に父母揃つて「いつ結婚するの? いつ彼氏を紹介してくれるの?」と聞かれる始末だ。ま、私も早く婚約はしたいんだけど、彼を悩ませ

るのは避けたい。今日は一人とも夜勤で夜からいなからしいが、困つたものだ。

さて、また暇になつてしまつた。「約束」の時間まであと、10分近くある。やることやること……

あ、そうだ。彼の寝顔でも見よう。多分もうそろそろ起きてしまうから、彼の寝顔を今のうちに堪能してしまおう。うんそれがいい。いつも凜々しくてカツコイイのに、寝顔になつたとたん赤ん坊のように柔らかくなるあの可愛い彼を見たい。惚れるが負けという言葉があるが、私は愛が強いんだから、勝ちだと思つてしまふ。彼が大好き。彼が愛おしい。私の愛は強い。いやどんどん強くなる。あありんくん。りんくん。お願ひ。早く?"

暴走する意識に身を任せ、PCを立ち上げ、彼の部屋に設置した監視カメラのソフトを起動する。普段デリケートな機械は優しく扱っている私だが、この際壊れてもいいくらいキーボードを叩く。別に壊れてもいい。りんくんの顔、声彼が見れるなら。頭の先から爪の先まで全て私のモノ。私の、私の、ワタシノモノダ……

おつと、ダメだまた。こんなに暴走してしまつては、「約束」の時間のとき歯止めが効かなくなつて彼を怯えさせてしまうではないか。落ち着かなくては……ソフトが立ち上がるまでの時間に、何とか暴走を抑える。暴走を抑えると丁度、画面が彼の部屋に切り替わる。「あれ? りんくん……起きてる」

彼にしては随分と早く起きてるな。私としては、寝顔も起きてる顔も大好物なんだけど、なんで起きてるのか気になつてしまふものだ。む、そんな真剣な顔しちやつて。カツコイイな……話したいな

こんなことだつたら、盗聴器もつけて置くんだつたな。「約束」は時間通りに、と彼と決めてしまつたのがあだになつた。とは、言いませ

んよおう。こんな時の為に、彼からハッキングの技術を教わったのだ。なんとかして、彼のパソコンのマイクから出力される音声データをこつちに繋げれば……とできた。よーし、彼は何をやつてるのかなう。

カタカタカタカタカタ

カタカタ音？キーボードをひたすらに打つてゐるのかな？一体なにを……あく分かつた

「執筆作業か……」

彼はたまに小説を書く時がある。まあ、ほんとにごく稀と言つてもいいのだが……彼が小説を書く時は、少なくとも200000～30000文字を書く。彼曰く「生ぬるい気持ちで書きたくないし、書く時はできるだけ真剣に書きたい」らしい。実際に私も読んだことがあるのだが、彼の才能と、得意とするシリアルスの織りまじる恋愛ストーリーに引き込まれて、文字の量など気にならないくらいすんなり読み切つてしまつた。要するにとても面白かつたのだ。いつも思うのが彼の作るものや、書くものには不思議な力があると思う。なんといふか、とても惹き込まれるのだ。彼が本気で小説なんかを書いたら、本当にベストセラーを超えてしまうんじゃないかと思つてしまふ。なんの運命か、惹き込まれ、自然と周りを笑顔にしていく弦巻こうとは、また違つた才能。私の周りのお金持ちは天才ばかりなのだろうか？まあ、るんつとお化けはいますが…：

「はつくしゅ……」

「なんですか、こんな朝早くにおきて……」

「なんか、朝からるんつと来ないなう」

「？なにを言つてるんですか日菜」

そんなことを考えている内に執筆作業が終了したみたいだ。

「あ～…まだ物足りないのに……」

彼が小説の執筆作業をしているときの真剣な顔をもつと堪能したかつたのに。これに関しては完全に失敗した。また次回ですか……貴重な映像を見過ごしたよ……

それにもしても、彼が気まぐれに書くのは珍しい。というか、気まぐれ自体私も数回しか見た事がないのだ。なにか、きっかけを作つて書いてる可能性が彼の場合は高いのだ。そして、例え彼であつても20000文字以上を書くのにこんな短時間で書くなんて考えにくい。少なくとも、深夜1時辺りから書き始めないと無理だ。なにをきつけにした?

あ、そういうえば昨日あこちゃん、りんくんと一緒にNFOやつて0時に落ちたけど、なんかあこちゃんにりんくん「付き合つてくれないか?」なんてチャット送つてなかつたつけ。一瞬で表記揺れかもしないと思つて、彼を咎めはしなかつたけど……

チャット履歴スマホで見るか。…………やつぱり…………

なんで、…あこちゃんなの???

私はスマホを潰す勢いで握る。

「これは、説教が必要かな…」

説教はどうしよう?とりあえず監禁?いや、それは彼が傷ついてしまう。とにかく、あこちゃんに追求ショウカ……いや、やつぱり直接縛ろう。彼を……

「ほかに移るなんて……ユルサナイカラ」

画面の向こう側にいる彼を見つめ、そつと画面を撫でる。彼は……私のモノダ。彼と触れ合うのも、愛し合うのも、見つめ合うのも、口付けを交わすのも、全て私だけの特権。ワタシダケノカレ。

ねえ、りんくんは離れたりなんかしないよね？私を捨てたりなんかしないよね？

ドロドロとしたドス黒い感情が私の中を埋めつくし、まるでそれだけが私を支配し動かすように、私をコワス。

チクタクと、私の部屋で静かに木霊する時計は、6時になつたことを私に知らせる為に大きな音をたてる。

ふふ、りんくん。「約束」の時間だね……

慣れた手つきでメッセージを彼に送ると、私はP Cをシャットダウンして、彼からの返信を待つ。

数秒して、彼からの返信が来る。

さて、話すことはいっぱいある。

昨日のこと。今日の体調。そして、彼の体調を気にかけての説教。当たり前だよ？彼女だもん。彼を気遣うし、彼を癒してあげなきや。なにより……

「ぜつつつつみたいに、私以外にはワタサナイカラ。ネ？リンクンモワタシノコト……」

愛し合っている私達の、邪魔はさせない……

「ふふ、まつててね、今……イクカラ……」

私は静かにめを閉じ、彼に電話をかけた。

# 天才少年の考えは矛盾だらけでふざけてる

人は皆平等だ、とは福沢諭吉が残した数ある名言の1つらしい。実際には、天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずという言葉らしい。ま、とにかく人類皆平等だよって言うことだ。

勿論、人には力量などの差はある。元から優秀な人もいるし、はたまたそうではない人もいる。にんげんのだからそこは仕方ないのだろう。生まれもつた才能などがあるのだから。と、ここまで聞くと、諭吉は矛盾したことと言っているように聞こえるだろう。では、諭吉は一体なにを言いたいのか。

知識の差、と言いたいのだと思う。

身近でわかりやすいものだと貧富の差だろうか。誰でも分かると思うが、どんな所でも貧富の差はあるだろう。裕福な家庭、そうではない家庭。必ずしも、貧富の差は生まれてしまう。

賢い人ほど、知識をつけ、巧みにその知識を使い高い位に付きお金稼いでいく。逆転して考えれば、貧乏人は知識を身につけようがないということだ。だから、いつまで経つてもその差は埋まらない。むしろ差は開く一方である。

ならば、勉強し知識をつける。勉強して知識を付ければ、富を得られる。だから、ひとは平等なのだと。他のことでも努力さえすれば、才能や力量の差は埋められる。そう言いたいのだ。

否だ

俺自身の結論を述べよう。ありえない。結論、と言うとピンと来ないかもしない。言い方を変えよう。自分自身の考えだ。

俺はこの言葉を、酷く無責任であほらしいと思う。何故か？至極单纯。誰でも分かる事だ。

「必ず上はいるし下はいる」

上には上、下には下。必ずある上下関係だ。

よく考えればわかることだ。結局は不平等。そんな言葉などありえない。冷静に考えれば簡単な話だ。

わかりやすく言おう。

例えば才能に満ち溢れ、将来を期待されるものは大きく評価される。だが、逆はどうなのだろうか。もちろん全ては逆転し、酷く評価されるだろう。

知識を付けければ評価される？否だ。

それよりも上がいれば、そんなもの簡単に霞み消え去るのだから……例え、自分が努力と研鑽を続け1番上に行つたとしても、また「次」の努力と研鑽。評価をつけられ、凄いなど言われるのだろうが、決して認められることはないのだろう。なぜなら、努力を知らない。表面上にある結果のみを評価されるのだから。自分自身が認めらることは決してない。

結局は、自分を騙しみんな同じ土俵にいるから、一緒に頑張つていいこうぜなんていう、クソみたいな綺麗事だ。そんなもの、俺が真っ向から否定する。

何で、こんなにも反抗的なのか？それは、俺自身が問題だ。もしかしたら、こんな捻くたやつじやなかつたかもな。

理由は単純。俺は才能を持っている。いや、俺には才能が大きな備わつてしまつたが正しい言い方だろう。

ずっと疑問を持ちながら今まで生活してきた。何故こんなにも自分と人とは違うのかと。

俺は、ある大企業の一人息子として生を受けた。勉強は聞き、読み、教わり、取り組めば全て出来たし、運動に置いても人のものをみて真似するだけで難なくこなすことができた。まだ、自分が幼い時は、こんなこと誰でも出来ると思っていた。前提の言葉を信じきっていた。自分のように出来ない人は、その為の知識を、経験を、努力を積めばできるのだと。

でも違った。現実の非情さを身にしみて知ったのだ。俺は優遇されている人間なのだと。そんな綺麗事は、ゴミクズのように碎け散るのだと。結局は才能や環境に左右される。平等など元から無い。不平等の元で生きる。

弱肉強食とはよくいったものだ。弱いものは強いものに食われる。同じように、才能のないものは才能のあるものに潰される。どれだけ努力しても、何度も知識を深めようと、天才が軽く努力、知識を深めれば、軽々とそれを超える。弱者が多大な努力をしてようやく超えたレールを、強者はそれを跨ぐかの如くに軽々と超えてしまう。これのどこに平等などという概念が存在するのだろうか。

そうなると、俺は強いものの方に部類されるのだろう。弱いものは淘汰される。まるでゴミのようにだ。この世界のルールは酷く歪んでいる。勝者は肯定され、敗者は否定される。それが成立してしまう、腐った世界だ……

自分に才能があると気づいた時、心底自分が嫌になつた。自分はこれまで、知らぬ間に何人の人間を貶めてきたのか……

ここではあえて、貶めるという言葉を使うが、今までの自分は本当に酷く、醜いものだつた。

今思えば、この才能を与えられ、親に期待されることは、無駄にその才能をふるつて皆からは冷たい目で見られ続けられた毎日だったと思う。無意識にほかの人間を突き落としては「いいよな、才能があつて」なんていう嫌味を吐き捨てられていたのだろうか？または、自分の積み上げて来たものを簡単に踏みにじられ、憎悪に満ち溢れていたのか。いずれにせよ、俺には知る余地すらない。

いつしか、この毎日に嫌気がさして、全てを投げて逃げた。この重圧から、このクソみたいな才能からとにかく逃げたかった。捨てたかった。幸い、親は大企業で大金持ち。適当な理由をつけて逃げ、一人暮らし始めた。家賃や生活費は親が支給してくれた。こういうのを親の七光りと言うのだろうが、ここまでしてでもあの生活を捨てたかったんだ。そして、これを境にして学校にも行かなくなつた。テストの時と、単位を落とさないための必要最低限の授業日数を稼ぐ為だけに学校へと登校する。そして、それ以外は家でずっとゲームをしていた。

そうだ、俺にはこれが1番似合つて。誰にも、自分の存在を知らず、ある程度のお金を支給して貰つて、持ち前の才能で軽く金を稼いで生活していく。生活面では生きていくには仕方がない。嫌な才能に頼らないと行けないのは皮肉なものだが、これに関してもどうしようもないだろう。

だから、代わりに俺は誰とも関わらずにこのまま一生、ひつそりと生きていこう。本当の俺は誰にも、みせない……

そんなある日だった。それは、あまりにも唐突だった。

それは、NFOというオンラインゲームをしているとき。やることもなく、適当なルームのマッチングをしてあるプレイヤーと出会った。

「R i n R i n……おぼえやすい名前だな……」

内心で思ったことをそのまま復唱する。

俺も、キャラネームはR i nだし、同じようなもんだ。てか、俺の名前の2倍Ver.みたいな感じだな。なにか、変な縁でもあるのだろうか？

まあ、名前なんてどうでもいい。結局の所ゲームだつて、ただの暇つぶしの娯楽に過ぎない。本気で楽しいだなんて思えたことないしな。全部この才能のせいだ：

【R i n >> R i n R i n : よろしく】

とりあえずは軽く挨拶だけでもしといった方がいいだろ：

これが最初で最後のマッチングだろうし、馴れ合うつもりはないがな。フレンドになるつもりもない。あつちから来た場合は……

考えなくもない。

【R i n R i n >> R i n : ちらこそ（・ω・）／＼

毎日退屈で、つまらない日常。そう、それが当たり前だった。ゲームでも持ち前の才能が嫌でも発揮されるのだから。

だが、こんじつこの日常に変化が生じ始める。

このマルチをはじめ、クエストに行き早2時間が経過しようとしていた。

一般から見れば何ら普通に思えるだろうが俺にとつてこれは異常だつた。まあ、これにはかくかくしかじかと色々な意味もあるけど、大半は俺のプレイスタイルと才能に問題があつたためだ。こんな俺とはマルチとにかく俺とマルチをやるやつなんて、ましてや1時間以上もやつてくれる人なんて、これまでに1人もいなかつた。最高マルチ時間は46分58秒。何故かメモつてた。特に理由はないが：

更に俺が驚いていたのは、自分自身の事だった。

【Rin Rin >>> Rin : 今日はありがとうございます！お陰で素材回収もスムーズに出来ました！（つ、ω、c）】

【Rin >>> Rin Rin : いや、こちらこそ。色々付き合って頂いて。】

自分の才能に確信してから初めて、自分自身の才能が嫌に感じられなかつたのだ。

とても、とてもスッキリした気分だつた。  
自分にかかっていた重荷を綺麗に取られたかのように爽やかに気分だつた。実際この人にその気は無い。でも、とても感謝の気持ちが込み上げて來た。恩付けがましいが、その気持ちは本物だつた。自分を、自分として見てくれている様で…

(……この人なら……この人ならもしかしたら……)

俺は、何故だか聞いて欲しくなつた。たかが、ゲーム。顔も名前も知らない人。でも、何故だか、打ち明けたくなつた。この人ならと。そう思つてしまつた。ただの衝動的なものかもしれない。不思議な事もあるものだ。でも、気まぐれでもいい。無意識に変化が欲しい、と心の中で思つていたのかもしれない。この日常に。俺自身に。だからこそ。

【Rin >>> Rin Rin : あの、本当にどうでもいい話なんですけど、俺の話を聞いてくれませんか？】

手馴れたタイピングでチャットを送る。

身勝手かもしれない。気持ち悪いかもしない。実際驚いてる。あれほどまでに否定し続けてきた考え。今でも、自分の考えを変えるつもりは無い。あんな想いをするくらいなら他者との関わりなんて持たない方がいいと。行動と考えは矛盾している。それでも俺は…：

【R i n R i n >> R i n · なんですか？私で良ければ聞きますよ！

( \* `、\* ` )】

【R i n >> R i n R i n · 少し、俺のリアルの……話を聞いて欲しくて……】

この人なら……信じられると思つたんだ：

朝の5時半。力タカタと、東京某所のアパートの一室にキーボードを打つ音が鳴り響く。手馴れたタイピングさばきは、目にも止まらぬ速さで、画面には1つ1つ字が増えていく。なにをやっているか、気づいてる人もいるだろうが、なんて言うかまあ、執筆作業つてやつですわ。ほら、たまにクラスに1人はいるだろ？ 根暗で、何故か小説投稿してる奴。あれ俺だから。

まあ、こんな感じに飽きもせずこうやつてPCと向き合いながら早5時間程経過している訳だが……普通だつたら、執筆などとうに終わってるのだが、衝動書きというのは、展開も1から考えながら書かなきや行けないから、少し詰まりながら書いていたわけだ。どんな天才だろうと、1からものは作れないだろう？それと同じさ。そして、ここまで遅くなつちまつたわけだ。

5時間、つていう時間ずっとやつていて眠くならないのか？なんて言う疑問は、俺にとつちや愚問！1年間ゲーム廃人生活をしてきた俺を舐めるでない！今は違うけど……

もともと、根っこからの夜型だしな……

こうやつてたまに小説を書くのも悪くない。実際楽しいしな。

お、いきなり驚いたかな？悪いな。自己紹介もせずに……誰も俺

のことなど興味無いだろうが、数少ない俺の名前を知りたい人達のために、自己紹介したいと思います！

俺の名前は天神輪渡高校2年生。年齢16歳。自宅は杜王町北東部の別荘地帯にありk

じゃなくてだなあ！つてついノリでふざけてしまった。じゃなくて！……

まあ、とにかく軽くの自己紹介はこれで終わりだな。はい、自己紹介終了。吉良○影さよならだ。地獄へ行つてらっしゃい。

ジョ○ヨに興味がある方々。是非、単行本を買うことをオススメする。ちなみに俺は第4部が大好きだ。特に吉良吉○が本当に大好きすぎる。あの、独特な今までに無かつた悪キヤラ感がたまらん。読んでるうちにハマつて、買おうつて思つた時にはもう購入は終わつてしまつたねハイ。

…………すいません、自分は、自分の趣味を押し付けるドチンボ野郎です、はい。

さて、本題に戻るとしよう。

俺が何故小説を書いているかというと……まあ、あれだよあれ。忘れた…もういいや

（趣味でやつてます）

あゝそうそう。趣味趣味……つてだれ？

（あ！やべ……）

やべつて……なんか、途端声聞こえんくなつたし……なんなんだよ：ま、趣味でやつてるわけだが、この作業は毎日やるの？つて聞かれるとそういう訳じやない。趣味つていつてもガチガチでは無いのだ。所謂暇つぶし。たまに書きたくなつて書くような、そんなものだ。小説を投稿して満足感が凄いって理由だけでこれまで書いてきてる。本当にくだらない理由だ。まったくもう。眞面目にやつてるやつに謝れってんだ！

すいませんでした「〇」

気になるやつのために簡単にここまで経緯を説明するぞ。聞きたくないやつは適当に飛ばしてもOKだ。

今日は0時までオンラインゲームをして、ネ友兼リア友さんに小説の相談に乗つてもらつてそれをメモつたら寝ようと思つたんだが、根っこからの夜型の俺がゲームをやつてすぐに寝れるわけでもなく、こうやつてもう1つの趣味で不定期に執筆する小説の作成作業に勤しんでいるわけなんだが。

あ、ちなみにもう1つの趣味はオンラインゲームだ。最近だとNFOが最高に楽し(r y

んで書いてるうちに夢中になつてたらいつの間にかこんな時間に、  
という訳だ。

とりあえず、状況は分かつて貰えたと思う。簡潔に言えば、ネ友兼  
リア友さんの相談を聞いた後に寝る気も起きず、小説書いてたら、い  
つの間にか朝になつちやつたなんていうなんとも間抜けな理由だ。  
現に、とてもいいペースで飽きもせずキーボードを打つてるしな。正  
直いって、書いてる間は本当に時間の経過が早く感じてしまう。趣  
味つてのはいいもんだ。

まあ、デメリットとしてはそう感じすぎてしまうことだな。それの  
せいで前は3時間も遅刻して教師にこつびどく叱られたからな。

さて、そろそろこの戦いに終止符を打とうか。約5時間40分。長  
い戦いだつた。お前達のことは決して忘れないよ。ま、今から投稿す  
るぶんなんですけどね！

ようやく作業が終わりエンターキーを押して投稿が終了する。ん  
と伸びをしながら、達成感に満ち溢れる体を起こして体を軽く解  
す。体からバキバキバキって鳴つちやいけないような効果音がなが  
れてるけど、気にしちゃいけない…。

「あ~~~~~、腰が痛い。もう歳かね」

16歳のガキがなにを言つているのやら。この際もう、ジジイでも  
なんでもいいが、罵るのはやめちくりな。一応16歳なんで。ジジイ  
なんて言われたら、僕の豆腐メンタル崩れちゃう…。  
だったら最初から言うなという話なんだが、ここは軽くスルーして  
貰うのが俺としては得策だと思う。

それにしても、よくこんな社会不適合者の俺が、こんな風に学校に

行つて授業を受けて帰るなんて学生じみたことが出来るようになつたものだ。今では、こんな感じで趣味を午前6時前には終わらせ、制服に着替える準備をしているのだから。とても、3ヶ月前までゲーム廃人生活を送っていた人間とは思えない。この3ヶ月つていう短い時間で変われたのも、全て彼女のおかげである。

ちらつと、机の上にある写真を見る。

「はあ。何で、ここまで好きになつちまつたんだ。昔の俺何処行つたんだ……あくつそおー！ 可愛いな、畜生！」

机の上に飾つてある写真を見て、ベッドに転がりながら悶える。第三者が見たら凄い光景だ。気持ちが悪い、氣色が悪い、何やつてんだけの、言葉が出てくることだろう。尚、恥など無かつた。

ないよつ！ 恥ないよつ!!

ゴホン。決してふざけてる訳じゃないが。話を元に戻すとしよう。

写真の人物は、もう分かると思うが俺のお付き合いさせて貰つてる彼女さんだ。

名前は白金燐子。しろかねりんこ極度の人見知りで他人とコミュニケーションをとるのが苦手な女の子だ。大人しくて臆病な性格なんだけど芯はしつかりとしてて、本当にいい子なんだよ。本当にもう、自分でもどうかつくくらい毒されてる。本当にどうにかなつてしまふくらいだ。

会つてまだ3ヶ月。付き合つてからまだ2ヶ月しか経つていない。なのに、何でこんなにも好きなんだろう。似合わないが、本当に運命を感じてしまう。初めて会つた時から、俺はあいつしかいないつて、心の中で思つていたんだと思う。

まだ短い時間の付き合いだけど、燐子と過ごした日々は宝物だ。

そして、この写真も宝物の一つ。恥じらいながら、ピースをしてい  
る燐子と、馬鹿みたいに緊張して俺とのツーショット。

この燐子マジ可愛い。マジ天使。マジ女神。マジ極女神。  
……………  
極女神つてなんだ？まあいいや

（ああ、早く燐子の顔がみたいなー燐子の声が聞きたいなー）

デヘヘと、自分でも気持ち悪い声を上げながら、ベッドの上で寝転  
がる。やばいやつだ。こいつ、やばいやつだ。

「つて、もうこんな時間か。約束の時間じゃねえか」

不意に時計が目に入り、時間を確認すると5 時の55分。「約束」  
の時間まで後5分、だが燐子だと、結構早めに掛けてくるかな。  
引っ込み思案なのに、変に律儀な所あるし。ま、そこが可愛いんだけ  
ど…：

（リア充爆発しろ）

また、なんか聞こえたけど完全に嫌味じやねえか。彼女作ればいい  
のにさ…：

あ、分からぬ人ように、「約束」のことについて説明しとくぜ。

これは俺達2人が決めた、朝の挨拶と健康チェックを兼ねた、会話  
のお時間なのだ。その時間は毎日朝の6時に必ず行うようにしてい  
る。学校とか、たまに燐子か俺がお互いの家に行く時があるから、話  
す時間はだいたい15分程度だが、俺にとつて毎朝の至福の時間なの  
である。

R A I N N のビデオ通話でお互い顔を見ながらいつも話している。  
顔も見れて、声も聞こえるつてもうそれ最高だよな、本当。R A I N  
N 最高、マジ至高ですわ。

さて、そろそろ電話かかってきそうだし、準備でもしておこう。つと、その前に。本人の前ではまだ恥ずかしくて言えてないけど、練習がてら。写真に……

「えつ、えつと燐子。その、」

こういう時にヘタレ属性になるのは、本当無くすべきだよな。でも、いつか必ず言えるように、その為の練習だ。

「あ、愛してるぞ……」

今日も、俺の1日は始まる。  
退屈じやない、楽しい生活が。

## 相対性理論とその原理。あ、授業じゃないよ？

どんな人間でも苦しいことや楽しいことを体験したことはあると思う。そして皆さん同じく体験したことがあると思いますが、楽しいことは直ぐに過ぎてしまうけど、苦しいことは、とても長く感じるというものがあるだろう。

これは一つの時間の相対性理論と言われる。

相対性理論とは皆さんもよく知る天才物理学者、アインシュタインが説いた理論だ。光の速度に近づくと時間は遅く流れるつていうアレ。難しいと思うので簡単に説明してみようと思う。まあ、期待はあるな。

わかりやすい例でいうと、「カイジ」という漫画を知っているだろうか？

分からない人でも分かるように今からいう説明をしよう。

この漫画の中で、敵役が主人後に對して土下座をするシーンがあるので、その敵役のボスがある提案をするのだ。

「誠意を示して貰う為にはただの土下座ではなく焼き土下座をしよう」などというあまりにも狂った提案。

これをその敵役が10秒感行うというシーンがあるのだ。これがとても惨い。

これに時間の相対性理論と何が関係あるのか？それはこの焼き土下座を見ている時間に關係がある。

たつた10秒。そう皆さんのが休みのときなどで、だらだらして暇な時に直ぐに流れしていく10秒という時間。だが、主人公にとつてこの10秒は永久に感じられたらしい。実際に見たものにしか分からな

い感覺なのだろう。永久にも感じられる10秒。まさに一つの時間の相対性理論である。

何故こんなに長く感じてしまうのか。

それは脳が新規な刺激を前にすると、その時間を長く感じるという性質があるからだ。このシーンで説明するなら、焼き土下座などといふとち狂つたもの。つまり、人生の中でここまで惨いことを初めて見たことになる。脳にとつては新規な刺激になる訳だ。そして、恐怖心もこれに関わつてくるだろう。初めてが重なりに重なり、この時間感覚を産んだのだ。

逆に楽しいことは早く感じるだろう。

これは仕事と自分が一体となり1種の「没我」となつている状況。特に「フロー」と呼ばれるものだ。好きなアニメを見ている時間は一瞬だろう？つまりそういうことだ。

こんな感じで、俺達が主観的に感じる時間つていうのは、脳の働きによつて伸び縮みする。ぎこちない時間は長く、楽しい時間は短く、苦痛の時間は長い。こんな感じで数多くの相対性理論があるわけだ。

え？全然分からなかつた？ま、多少はね？†悔い改めて† by

YJP

閑話休題

今俺は、どこに立たされているのかが分からぬ。逆境なのか。そ

れとも順境なのか。そもそもそれは言わないのかは定かではない。とにかく、曖昧な状況に立たされることは確かだ。自分でもよく分かつていいない。

俺は、毎日の日課。これについては前話を「参考」にお願いする。その日課で彼女と電話でやり取りをしている。毎日の挨拶を交わし、朝の雑談。これは、そう『いつも通り』。だからこそ、その先の曖昧な場所なのだ。うーん、こういう場合どう言えばいいかがよくわからん。ただ、これだけはハツキリ言える。それは……

「ねえ……りんくんなんですか？ なんでなの？」

「あ、あのな？ 燐子とりあえず落ち着いて……」

「十分落ち着いてるよ？ それに、私は質問してるの……宥めてとは言つてないんだよ？ ただ質問してるだけ。りんくんは、学校で質問を宥めて返すって教えられたの？ とにかく怒つてないから順番に私の質問に答えて？ 昨日あこちゃんに相談してるのをなんで私にしなかつたのか…………なんでその事を隠したのか…………そして、自分の健康を鑑みずに何故体調を崩してしまったかも知れない徹夜をしたのか…………徹夜のことは前に注意したよね？ りんくんが体調を崩してしまうかもしれないことは控えてつて。あとは、なんであこちゃんに

相談して私には相談してくれなかつたのか。相談しちゃ駄目とは言わないけど、何で相談してことを隠したのかなあ？私だつてりんくんをこうやつて言いたくないんだよ？でも心配だからやつてる事なのさ、順番に答えてね。りんくん？」

おこですはい。現在進行形で彼女が、おこでござります。やべえよ…やべえよ…

怒つているであろう理由が燐子の口から次々流れていくる。どうしてこうなつた……こうなる覚悟は出来てたのか？

すまん、ブチヤラテイ……全然出来てなかつたわ……つか、予期してねえよこんな事態。まじで……身から出た鎧なのかこれは……事の発端はほんの数分前に遡る。

☆★☆★☆★☆★

ピロン

携帯の通知音が部屋に鳴り響く。

6時ちよつきりだ。燐子はいつもこの時間を厳守している。もうこの通知音爆音にして目覚ましにしてもええかも……

まあそれは、近所迷惑だからやるつもりはないがこの時間の厳守ようからも分かるよううにうちの彼女は本当にしつかりしている。自分も見習わなければならぬ。こんな素行不良な俺の事を好きになつてくれた事が未だに謎だ。

R A I N Nを開くと、そこには短く「約束の時間だよ」と書かれていた。こういう簡単なメッセージで、毎日やつてることでも、やつ

ぱり彼女からのメッセージはとても嬉しい。マヌケな話だが、彼女にメロメロの骨抜き状態にされているようだ。

「OK。掛けてきてもいいよ」 つと。

彼女に電話をかけるように促すメッセージを送る。

この「約束」についてだが、基本的に約束の電話の時間は燐子が俺に確認のメッセージを送つて、俺がOKを出したら燐子が電話をかける感じだ。

これは付き合つてから直ぐに始めた事なんだが、1回だけ俺が風邪で返信が遅れたときはやばかった。主に燐子からのメッセージがとにかく通知音が鳴るのだ。気づいたのが30分後くらいだつたんだが、アプリを見てみると通知数が999+を超えていてまじでビックリした。

それ以降は、できるだけ早く返信するように心がけている。1秒でも早くを胸に抱き。これ以上、燐子を困らせたり悲しませたりしないしな！

返信から、10秒も経たないで電話が鳴る。画面には「R i n R i n」と表示されている。

これはRAINNでの燐子の名前であり、オンラインゲームなどのハンドルネームもある。因みに俺たちが知り合つたのはNFOという現在普及のオンラインゲームで知り合つたのだ。その話はとりあえずまた後日で…

「もしもし？おはよう燐子」

電話に出て、電話の向こう側にいるであろう彼女に朝の挨拶をする。

「うん。おはようりんくん。今日の体調はどう？」  
「万全万全！燐子は？」

「私も元気だよ…」

これが俺達の朝の挨拶の時間。つまり「約束」である。

これを始めたのは、燐子の提案だ。

理由としては燐子曰く「朝早くにりんくんの声を聞きたい」かららしい。

俺としては彼氏冥利に尽きる。ていうか尽きすぎてパンパンですわよ。

でも、こんなにいつも朝早くに起きても大丈夫なのかと思つてしまふ。彼女からしたら習慣なんだろうが、俺からしたら1年間続けた、マルデニート生活のせいで未だこの時間は眠い。あまり無理はして欲しくないからな……燐子がしたくてしている事なのだから、止める気にはなれけど、心配してしまうのがジレンマである。そんな事を考えていると、燐子が話を持ち出す。

「そうそう。ねえ、りんくん」

「ん?なんだよ」

「昨日、私がNFOのパーティ落ちたあと、あこちゃんと話してた相談つてなのなの?」

「……………へ?」

この数秒間の悩み事や考えことも全て吹っ飛んだ。何故かつて? 答えは簡単。

(詰んだ……)

朝から修羅場である。

★☆★☆★☆★☆★☆★☆

「ねえ、答えて?」

と、こんな感じで今に至るわけだが。  
もう1回いうぞ。どうしてこうなった……

まあ、大体察しはつくがどうしてなんだよ……

好きな人から、怒られるつてのは我々の業界ではご褒美なのだろう  
が、こうやつて何故知っているのかを問い合わせられるのは怖いものもある訳で……

こういう場合つて時間が早くすぎるのか、遅く進むのかは定かではないが、時間の相対性理論つて無視な気がする。

AINシユタインさん、貴方バカだつ n (殴

話を戻そう。

何故かは知らないが、燐子がNFOのパーティ。つまりギルド（俺の友達も合わせて全員で4人の小規模ギルドだが）内の、燐子が落ちたあとのチャット内容を把握しているようで……何それこつわ……

「何を相談してたの？」

「それは……」

「つまるつてことは、そういうことなの?」

「そんなわけないだろ!」

と言つてもだ…

もし仮に、あのチャットを知っているなら燐子としては少し不安にさせてしまつたのかもしれない。確かに内容としては…

『なあ、あこ。ちよつといいか?』

『?どうしたのわたるにい』

『ちよつと相談に乗つて欲しいんだが……ちよつと長くなるからボイ

チャに切り替えるぞ』

『わかつた！』

ここで、確かボイチャに切り替えたんだっけ……

確かにこれだけ見たらボイチャまでの経緯がわからない。この後の話がわからないわけだし……

でも、俺があこに相談したのって燐子とまた今度行くデートの相談なんだよな

俺と燐子が付き合い始めたのは、出会つてから1ヶ月後。お互いつれだつたつてことやまあかくかくしかじかあつたこと（この話はまた後日）で、かなり早く付き合い始めた俺達な訳だが、付き合つてからまだ2ヶ月しか経つてない訳だし、俺も燐子の事を完全に把握してる訳じやない。だから、燐子の親友であるあこに相談したのだ。どんな所だつたらデートする場所に最適なのかとか、まあとにかく色々。

でも、何より大事なことは

『いい？最も大切なのは、りんりんの為にどれだけわたるにいが考えて行動できるかだよ？例えるなら誕生日の時にどれだけ想いのこもつたプレゼントが出来るのかとか。とにかく、わたるにいがりんりんに何をしてあげたいかが、大切なの!!あとはわたるにいしだい!!』

俺次第、か……

兎にも角にも、今のまでは埒が明かない。燐子に事情を説明しないと事は進まないし。悩んでる時間は無駄だ。

「ねえ、りんく…」

「燐子！」

「つ！」

燐子は俺の声にビックリしたようで、電話越しからでも、少し狼狽してるのが分かる。ここだ。この状況を逃さない。隠すつもりだったけど、仕方ない。

「俺があこに相談してたのは燐子との“デートの事なんだ」

「え、私との？」

「そう。何回かデートには行つてるけどさ。燐子のことしつかりエスコートしたくて。だから、燐子の事をよく知つてゐるあこに相談したんだ。俺と燐子は彼氏彼女つて関係だけど、お世辞にも長い付き合いだつて訳じやないからな……」

「りんくん……」

相談した内容を打ち明けると、燐子の様子が変わつた。電話越しだが、燐子が落ち着いてくれたのが分かる。

「りんくん……私……」

「大丈夫、分かつてるから。ごめんな。不安にさせたよな」

「そんな！私が勝手に暴走しちゃつたから……」

「いいんだよ。俺だつて、もし燐子が俺以外の男と親しげに話してたら嫉妬したりするだろうしな」

「りんくん……」

ようやく燐子が分かつてくれたみたいだ。朝からぎこちなくなつたら最悪だからな。自分の好きな人とぎこちなく1日を過ごすなんて絶対嫌だし、解決出来て良かつた：

「じゃあ、りんくん。また7時半にそつちで…」

「おう。気をつけて…本当にごめんな？」

「ううん。全面的に私の暴走のせいだし、本当にりんくんのせいじゃないよ。私こそごめんね」

「ああ。こつちに来る時は気をつけてな？燐子に何かあつたら、燐子の両親にドヤされちまうからな」

「ふーん。ドヤされるのが嫌だから事故をするなど？随分と軽く見られてるね」

「じよ、冗談だつて……」

「もう……そういう冗談を言つちやうところも好きだけど

「お、おう……照れる」と叫うな……好きだよ、そういうところも…………」

和んだ空氣で、話が弾む。

朝はやつぱり明るく始まるのが1番だ。誤解も解けて、スッキリしたし、今日もいい日になりそうだ。時計がさしている時間は6時半なのに、自分が感じている時間の感覚は10分にも満たないものに感じる。

あれ？ やっぱりアインシュタインって天才じゃね？

楽しい時間はあつという間に過ぎるもの。もういい時間だ。まだ、話しきりないがそろそろ電話を切る時間だ。

「それじゃまたあとd」

「どうした？」

「忘れてることがあるよ？さて、なんでしょう」

え？忘れてること？誤解は解いたぞ。

「私、前にも言つたよね。徹夜は控えてねつて。さつきも言つた気がするんだけど…」

燐子は何故、私の生活を知っているの？

私の耳に何故、今日の徹夜の事を言わされているの？

教えて、教えてよ……

うみみしやま  
作者様

(知るか。自分で考えろ)

んな、理不尽なア!!!!!!

「りんくん。少しの遅刻はどうつてことないんだよ？」

「遅刻。ダメ。絶対」

「某ラブコメボツチ主人公は、遅刻をなんと唱えたでしょう。答えなさい」

「逆説的に考えて、遅刻は正義……」

「それじゃ、覚悟してね？」

「は、はい……」

この後、燐子に説教されたのは言うまでもない。

その時間は長くもなく短くもない、曖昧なものだった。強いていうなら、恋人との時間つてのは、曖昧なものが多いくてことを知つたことだろうか。

燐子が俺の私生活を知つていることはまた今度聞くとして……とにかく言いたいことがある。

やつぱりアインシュタインさん、バカじやん（殴殴殴殴殴殴

## 奇妙な運命

舞い上がるという言葉がある。

意味合い的には心が舞い上がつて調子に乗るとかそういう意味のもの。

基本的に日常で使われたりする表現方法としては、気持ちが舞い上がるなど使つたりするだろうか？

疑問文で投げかけてしまつたが、恐らく大半の人がそれくらいしか使わないんじやないだろうか。というか日常で舞つてる人はいるのだろうか？舞つてる人は舞つてる人なんだろう。どういう心情なのかは知らないけれど…

話が逸れてしまつたが、舞い上がるというのは、嬉しい時や、楽しい時、幸せな気持ちだと最高の気分だとか、それと同じような意味合いだ。そんな感じで人は状態というのを表現する。本を読んでいてこういう表現は結構好きだ。

それを踏まえ、今の私の状態を説明しよう。

最高に幸せで、気持ちが、心が、舞い上がつて……いや、舞踊り上がつてしまつている。

あんな感じに……朝から、朝から、好きだなんて……私、その言葉だけで世界征服出来ちやう気がするよ……

どこかの少女漫画で使われているような表現だけど、今の自分の気持ちちは表現しきれない域まできている。到達地点は頂より高い……

「約束」の電話が終わり、現時刻は6時50分。いつもなら、15~20分で終わる電話だが、2倍もの時間が経過してしまつていた。

なんで、こんなに時間を使つてしまつたというと、お灸を据えない  
といけないことがあつたんです。それで、つい  
彼の彼女として、当然の事をしたまで。この程度は慣れっこ。少し

前は1時間もしたことがあるし、序の口も序の口である。  
ましてや、これは自分が愛する人の事だと思えば、序の口の数が4  
乗ほどされてしまう。

でも、時間は時間である。序の口とはいえ、使つてしまつた時間は  
元には戻らない。りんくんと一緒に居られる時間が減つてしまつた  
が、彼の為に使つた時間だからしようがない。急いで彼の家に行こ  
う。

事前に準備しておいて良かつた。備えあれば憂いなし。

ここからりんくんの家まで15分ほどだ。到着するのは7時  
ちよつと過ぎ。登校する時間が8時10分くらいだから、居られる時  
間は1時間はあるはず。

お腹がすいた状態だし、りんくんの朝ごはんが楽しみです。

「じゃあ行つてきます。待つてて……ね……♡」

私は、ゆっくりと部屋のドアを閉じた。

☆★☆★☆★☆★☆★

わたしのside

俺の名前は天神輪渡。あまがみわたる

NEETだ。働いたら負けだと思ってる。

ゲームと自堕落に惰眠を貪ることこそ正義であり境地。学校なん  
てクソツタレ……俺はこのまま自堕落に暮らしていくんだ……ハハ

……ハハハ……

なうんて冗談だ。すまん、自暴自棄なんだ。許してください何でもしますから（なんでもするとは言つてない）どうでもいい話、俺は嫌なこととかあつた時に、すぐポジティブ思考に切り替えられる奴が嫌いだ。だつて、羨ましいもん。

燐子に約30分間の説教を受け、現在の時刻は7時前まで來ていた。本来であれば、6時45分あたりから、一緒にご飯を食べて、登校までイチャつくつてのに……自業自得過ぎるんだけどな……。

怒られたのは徹夜についてだ。それについて30分も怒られた訳だ。

燐子は俺の健康面や、生活面のことを心配してくれていたつてのに……俺ってやつはつくづくダメ人間らしい。あそこまで彼女に想われておきながら……

怒られて、かなり心にきてる。自分の彼女がこんなに考えてくれてるつてのに……しつかりと反省しないとな。

俺は何かに縋りつくように、部屋にあつたせんべいをかじった。

「つてかつた!! 何だこのせんべい!?

何これ!? せんべいってこんなに硬かつたつけ?! いつたいなんでできてんだよ……袋に商品名が書かれてるな……え、つとなになに? 「まるでダイヤモンドのようなせんべい醤油味……なんでこんなのが部屋に置いてあるんだよ!!」

需要が全く感じられんわ! こんなに醤油味とか書いてても美味しそうじやねえよッ!! 歯がお陀仏する物騒な醤油味せんべいって悪意しかねえだろ。一体何故こんなものが……部屋全体を見回してもこんなものが出てきそうなものなんて……ん? なんだこれ。ダンボール箱?

あ、そういうば一昨日くらいに結構すぐそこにある天神家の使用人が持つて来てたな。カツターで開けただけで面倒だつたから中身見ずにそのまま放置したんだつた…

とりあえず中身確認してみるか。

「えへつと。生活面で使うもんが多いな。助かるから嬉しいけど野菜とトイレットペーパーとかは分けるよ…」

少しの愚痴を吐きながら中身を確認すると生活必需品とも言うべきものが多かつた。油や塩こしようといった調味料。野菜。トイレットペーパー。お菓子。…………コイツか…

高速で脳がフル稼働する。このダイヤモンドせんべい。略してモンベイをこのダンボールにぶち込んで俺に送り付けてきた人物。そのあらかたの犯人を絞り出し、ダンボールの底にてを突っ込むと、やはりそこにはあつた。犯人からの脅迫状…………もとい手紙。差出人の名前は…

「やつぱりてめえかよ……お袋オ……」

手紙の差出人。俺の犯人は母親だつた。

『歯がなくなつている頃かしら？それとも面食らつてる頃？いずれにしても滑稽で醜い感じになつてるのでしようねえ？あらあらごめんなさい。気を悪くしたら自分の顔でも見つめ直せば？少しほ人生をやり直したいとか思うかもね。せいぜいドブでも啜りながら生きなさい、この穢れた血 母より』

内容が皮肉しかねえ…

つか、穢れた血つて……半分アンタの血だからな!?分かつて言つてるとしても自分ディスつてどうすんだよ。御丁寧に母よりなんて書きやがつて。嫌味のつもりがよ…

手紙から分かると思うが、俺と母親との関係はかなり最悪だ。と

言つても、前に比べたら天と地程の差がある。これでもましになつた方なのだ。

少し昔の話をするが、こうなつてしまつたのは俺が一人暮らしを始めたことにある。

まあ、なんていうか一人暮らしその前の俺は、簡単に言えば缶詰め状態だった。

俺は昔学校から帰つてきたりひたすらに色々な勉強をさせられた。書道や茶道や弓道の作法の取得。色々な国の言語の獲得。言葉遣いやコミュニケーション能力の向上にまで力を入れられた。まあ世間一般でいう英才教育つてやつだな。これ以外でも色々なことを教えられたが、長くなるからここまで。

天神家は、この地域だと、つていうか世界的に見ても、有名な名家なんだよな。総資産はたしか5000億ほど。親父から聞いたことだから詳しくは知らないが、そうらしい。だからその一人息子である俺は物心着く前から、色々な教育をさせられてきたわけだ。将来この天神家を取り仕切るものとして恥をかかないようにと……。

俺が家を出た理由としては正にこれだ。俺はこんなもの受けたくもなかつた。ただ、俺は普通が良かつた。天神家の一人息子としてじやなくて、天神輪渡という1人の人間として生きていたかつた。無駄に才能があるからつて、そんなものを伸ばさなくていい。ただ周りの人達と同じの普通が良かつた。だから、家を出たわけだ。

そこで対立したのが俺の母親。俺の母親は普段はとても優しい人だ。だがそれとは裏腹に完璧主義者なのだ。例をあげるなら、昔俺がテストのケアレスミスで100点が取れなかつたとき、1時間の説教を受けたことがある。あの時から俺のテストの目標は必ず100点をとることだつた。理由は言うまでも無し。

まあ、俺の教育の中心人物もあの人なんだよ。だから、俺が一人暮らしをすると言った時はそれはまあ猛反発された。一体なんの為にお前を育ててきたのだと。恩を仇で返す形になつてしまつたが、おれだつたやつてくれなんて頼んだつもりはなかつた。あの時俺も必死だつたのもあるが、母親を押し切つて無理やり出てきたのが今この状態を生んだのだ。

ちなみに父親との関係は良好である。今は海外での遠征でいなけど心配してくれている。仕送りも大半が父親からだ。昔つから父親は俺を甘やかしてくれたからな。今でも変わらんが……。

さらに因むが、うちの天神家は両親共働きだ。父親が海外での契約や取引。母親は日本の天神の会社の責任取締役。いずれも万能両親つてことだな。その代わりめちゃくちゃ忙しいが：

ともかく、そんなこともあつて俺とお袋との関係は悪いわけだ。前はもつと最悪だつたけど…前なんて、顔を合わせたら殴る蹴るのオンパレードだからな。あの、美人なのに血の気が多い殴りをくらつたらダメージは著しいものなんかじや済まされない。一触即発とか、なにそれ美味しいの状態だからな。

糺余曲折を経て、なんとか今は顔をあわせたら悪口言い合うくらいの仲間までには良好にはなつたんだけど、こんな具合でちょくちょく巫山戯たことをしてきやがる。

つたく。変わらずお袋はお袋というわけか…

でもま、貰えるもんはもちろん貰いますよ。野菜とか調味料は正直有難いしな。あのお袋にしては優しい施しだ。

保管するため、賞味期限とかも確認しなくちやな。えーっと油の賞味期限はつと…

賞味期限1年前

「ふざつつけんなあのクソババアアア!!!!!!」

手に持っている油を床に思いつきり!<sup>!!</sup>投げつけ、届かないであろう俺の怒号をクソツタレあまにぶつける。なんなんだよ!?もしかして、この野菜も期限切れとかじゃないだろうな。このままだから切れてるのかとか分からぬし……

安心できねえ！

いや、落ち着け俺。まだトイレットペーパーとか使えるやつがあるじやねえか。これだけでも

紙に見えるプラスチック製のトイレットペーパー!!これで、新聞紙のまとめは完璧!!

「需要無しの巣窟かよここはアアア!!!!!!」

なんなんだよ!?トイレットペーパーなのに新聞紙まとめつてなんだよ!?ゴミ出しようだつたの!?紐があるだろ紐がアー!トイレットペーパーの要素ひとつも残つてねえ!じゃねえか!!

嫌がらせをさせるがために、こんなくだらないものを用意したのかよ。

訂正。父親は忙しいが、母親は暇人だつた：

クソツタレ。朝から疲れる……

なんで、こんなに疲れにやならんのだ。

楽しい1日が始まるつてなんだよ。リア充ですかア?  
……………はいそうです。

もういい、この中に入ってる物は学校から帰ってきてからでも十分片付けられる。というか、仕送りだつたら普通多い筈だし、こんなにこじんまりしてるわけが無いと最初から見抜くべきだつた：

仕方ないが、モンベイだけ冷蔵庫の上にあるバスケットに入れておこう。一応食べ物らしいし。これが食べ物とか信じたくないけど……

俺はモンベイが入つた袋を持つ。

「ん？なんだこれ」

持つた瞬間だつた。この袋の口に違和感を感じる。

この袋、明らかに1回あけて、もう1回閉じられてる。結構上手く細工されてるけど俺の目は誤魔化せないぞ。

一体なんの為に…

「中になにか入れたかつたとか？」

こんなの中に、何を入れたいんだ？でも確かに袋とかだつたら何か嫌がらせとして仕込んだりとか…奥とかなにかあつたり、：あつ、やつ

気づいた時にはもう遅い

「あー！やつちまつた…」

中を確かめようと袋逆さにしちまつた。モンベイが無残に床に散らばる。つかすつごいな、結構な高さから落ちたのに全然割れてしまえ。さつすが硬度10。というかこんな作れるんだつたらまじで他に技術と労力かけろよ。ま、とりあえずは食べ物なのだし捨うか。こんなことして、本当何が楽しいってんだよ…ふと、母親のことがまた頭によぎる。

「やつぱり、お袋俺の事嫌いなのかな…」

こんな関係だけど、俺はお袋が、母が今でも好きだ。教育のことは恨みに近いものはあるけど、それ以前に俺の事を育ってくれたんだから、感謝がないはずない。

ご飯も、シェフには悪いが、母のご飯が俺は大好きだつた。

ご飯以外でも色んなことをしてくれた母を嫌いになる訳ないんだ。今でも母のことを尊敬してゐるし、憧れてる。本当に元の関係に戻りたいと……

いや、これは望んじやいけない。俺は母の気持ちを踏みにじつた。それは変えようのない事実なんだ。これ以上求めるのは傲慢で強欲なんだ。

「はは、皮肉なんもんだよな。あの時は逃げたいと望んだ……でも、今はこんなんなんだからよ」

つくづく、自分には自業自得って言葉が似合うらしい。朝の事も、母のことも全てが自業自得。自己責任。俺は、なんでこんなにもクソッタレなんだ……

一度壊してしまったものは、もう二度と完全に戻りはしない。必死に直したつて、いくら繕つたて、壊れる前と後じやもう違うものなんだ。関係だつて同じこと。

自分で壊して、切り捨てて……自分でぶち壊した関係を今更戻したいだなんて酷く我儘なんだ。

「…………これで最後だな」

考えているうちにあつという間に散らばつたモンベイを拾い終える。

ただ、せんべいを拾つてゐるだけでこんなに虚しくなるのか？俺は

こんなことを望んだ訳じやなかつたのにな。昔の自分勝手で起こした破壊行為。母から逃げたのに、今はその人に固執している自分がいることに反吐が出る。

矛盾だらけで、自分勝手な自分自身を殺してやりたい。嗚呼、このせんべいみたいに母との関係も壊れなかつたら俺はこんなに悩まずにすんだのに…

思い出せば、思い出す程に気持ちが沈む。なんか、2ヶ月前のある時みたいだな。あの時は燐子がいたけど……今この部屋にはいない…

『りんくん！』

パンツ!!

部屋に音が木霊する。

俺は反射的に自分の頬を叩いていた。

辛氣臭くなつてもしようがない。今は今なんだ。現実を受け入れなきや、いつまでたつても前になんか進めやしない。3ヶ月まえの自分にはもう二度と戻りたくない。

考えたつて状況なんか一切変わりやしない。俺の気持ちが沈んでることで燐子を無駄に心配させたくないしな。もうそろそろ燐子も到着するだろうしこれ以上彼女に無担はかけたくない。

結局細工の意味はわからなかつたけど、また今度使用人にも聞いてみればいいか…とにかくこいつをバスケットに入れてご飯の準備しないと…

つてあれ？

「まだ全部じゃなかつたのかよ…」

机の下に微妙に見えるモンベイが見える。よく気づけたな俺。  
かがみ、机の下にあるモンベイに手を伸ばす。まったく、傍迷惑な  
せんべいだ。（自分で落としたのにこの言い分である）

「よし、取れた。つてこれ亀裂入ってる？まじかよ！」

うつそゝ。確かにダイヤモンドは普通にハンマーでわれるいいま  
すけどもお……落としただけで割れるんかいな。だつたら普通にに  
せんべい作れよ。

ほんと無駄な労力じやん。でも中身どうなつてんのか気になるな。  
作りがどうなつてるのか知りたかったし。一体どうやつたらせんべ  
いの原材料でここまで硬く……つてん？なんだコレ

「中身に…………紙？」

もしかしてコレが硬さの秘密？

なに？硬くなれ！つてこめた紙を入れたら硬くなるの？やかまし  
いわ。

でもほんとになんで紙が。フォーチュンクツキーならぬフォーチュンせんべいなんて恋しませんよ。恋するフォーチュンせんべいとか絶対ときめかねえだろ。需要なし×需要なしじやんかよ。絶望じやん。

一体なにが書かれてるんだ？  
俺は紙に書かれている文を読む。

「…………なるほど、な」

「ですか。そういう事か。だから袋に細工を……」

ピンポーン。

不意にインターホンが鳴り響く。ドアの向こう側にいるであろう人物は分かつていておりあえずモニターを見てみる。

そこには最愛の人がいた。すぐさま玄関口まで行き家のドアをあけ、：

「りんくん、りんくん♡♡」

彼女が飛びついて（。△。ノノ、☆キタキタキタキタキタキタ??  
つてまづい、このままで勢いで倒れ：

「だが断る！」

「? なにを?」

何その首傾げながらの抱きつきながらの上目遣い。めちゃくちや  
可愛いらもつとやつてくれ。

「おはよう、りんくん。ふふ、2回目だね……」

「おう。おはよう燐子。電話越しも可愛いけど、やつぱり実物が1番  
可愛い。最高、大好き」

「はわあ／＼／＼／＼もう……朝から……もう／＼／＼／＼  
よし、可愛いぞ。やつぱり燐子超可愛い！ R M Tりんりんマジ天使って俺の彼女の

ために出来た言葉だナ！」

名残惜しいが、このままじゃ埒が明かないから頭から湯気がでてる  
彼女を落ち着かせ部屋へと招き入れる。

「お邪魔します」

「はいどうぞ。適當な所に座つてくれ。今からご飯作るからさ」「  
あ、じやあ私も手伝う。いつも任せつきりだし…」

「じゃあ頼む」というと、燐子は満面の笑みでキツチンまでやつてくれる。本当はゆっくりしていて欲しいけど、彼女になる前と違つて、かなり強情になつたからな燐子。

それに、こんな感じで一緒に飯作るのってなんか、夫婦みたいで  
恥しい。

「なんか、夫婦みたいだね♪」

思考読まれたみたいに考えていることがかぶるな。運命感じるぞ。

「そうだね♪」

おつそうだな。…つて地の文読んでない!?

「うん、そうだよ?」

平原と言つて首を傾げるのやめろオ? 可愛いから…

「ふふつ…ありがと…」

何だコレ…ツツコミが追いつかん…

とにかく、料理だ。簡単なものがいいな。

献立は……よし。ポテトサラダとスクランブルエッグがいいだ  
ろう。

「ねえりんくん?」

「ん? どうした燐子」

ふと献立を考えている所を彼女が話しがけてくる。

「なにか、いい事でもあつた?」

「なつ!? どうしてそれが…」

「顔に出てるよ。嬉しそうな顔してるもん……可愛いね♪」

まじか、そんなに顔に出てたか?! 鏡見てくるか?

「りんくんが嬉しいと私も嬉しいな♪」

「正に一蓮托生だな。俺も燐子が嬉しいと嬉しいぞ」

「もう……ご飯作っちゃお?」

「そうだな…」

『風邪引くんじやないわよ？

京子より』

なんでもない、1日の1秒が、幸せな時間となり過ぎていく。今日もいい事がありそうだ。

### 【天神家】

ここは天神家。門をくぐれば、そこには信じられないほど大きな庭が広がっている。その庭の広さと言えば、家を6、7軒建てられるんじやないか？と思うほどに：

屋敷に入れれば、無数の部屋が迷宮区のように存在する。初見で入つたものは迷子間違いなしだろう。使用者が着いていなければ確実に迷子になる。

これはつい先日のこと。

カツンカツンと、1人の使用人の足音が屋敷の廊下に木靈する。この人物は、昔天神輪渡の世話役をしていた人物だ。輪渡からは『しー』

という愛称で呼ばれていた。今でもたまにコンタクトを取っている。

と、途端に足音はなくなり、静かな廊下へと元に戻る。使用者はドアの目の前に立っていた。ガタンと思いつきりドアを開けると、目の前には椅子に座っているであろう人物が、椅子を背に向かって座っていた。

使用者。いや、『しー』はその人物へと声をかける。

「京子さま。お荷物の方は使用者に送らせました」

「……そう」

「それで？何故あんな遠回しなことを？」

「決まってるじゃない……」

椅子に座っているであろう。彼女は背を向けながら窓の外を見渡す。

そして、突然こちらに振り返るとゲス顔で言い放つた。

「嫌がらせよっ!!!!」

「かつこよく言つても全然かつこよくないです。寧ろあほ面です」

「うつ、うつさいわい！」

2人の言い合いが部屋に鳴り響く。こんな昼から何をやつてるんだ、と思うかもだがこの2人の日常のようなものなのだ。

「まったく、京子さまもあじなことを致しますね。あんなの、普通気づきませんよ？」

「いいのよ。というか、気づかない方が私的にはいいのよ」「私的には……ねえ？」

「ちよつと？敬語なくなつてるわよ」

「あつ、ごめんなさい？焦れつたいものだからつい……」

「うつさいわよ！白金晶子！」

「フルネームで呼ばないでくださいまし」

「あんつたがさせてるんでしょうがア!!!」

ハアハアと、京子は息をあげながら田の前にいる使用人に突つかかる。

「ほんとうに不器用ですね、京子……まさか、せんべい全部にあんな面倒な細工をするとは…」

「うつさいわね。分かつてるとわよ……」

照れくさくなつたのか、京子はまた背を向ける。この空気はこの2人の中での日常茶飯事なもの。いつもは堅物な京子はここだけは肩の荷を下ろせるのだ。

「晶子も晶子よ。自分の娘を私の息子に取られて……」

「あら? 私は輪渡おぼっちゃまだつたら全然問題ないわよ? 今すぐでも式場の予約しますか?」

「しないわよ!!」

日常は繰り返していく。

白金晶子と天神輪渡。奇妙な巡りあわせなのだろうか。それとも運命なのだろうか。

いずれにしても、子は親に似るんだろう…

「どうか、何故せんべいなんですか?」

「それは私がただ単に好きだからよ」「適当ですか……」

今日も一日が過ぎていく…